

芭蕉翁繪詞傳

上

		和書門	
二	八	四	二
一	八	四	二
三	二	三	函
冊	架	號	類

405

庫文閣内		和書	
五	二	八	四
八	二	四	二
函	架	冊	號
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號和	28442
冊數	3 ( 1 )
函號	158 405

158-405



Kodak Gray Scale

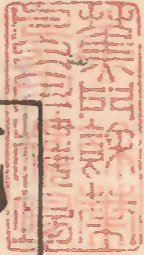
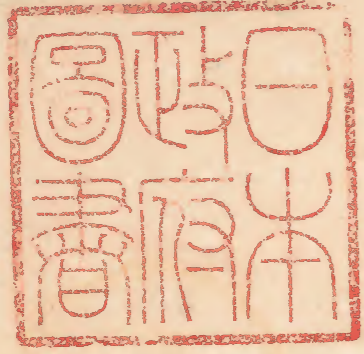
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



大本  
別号



芭蕉公羽林を言えを尋ねる所柏原の御門乃浮あふれ  
常陸助平正盛や中人の可き右兵衛尉平季宗  
とけ子彌平を衛尉宗清や中人あふ波羅乃  
入道相國共一門ふ人多くおもえ平家の士は  
中に表宗後の人をもとめたり

愚按東鑑ニ弥平左衛門尉 大系図ニ右兵衛尉季宗子宗清

武家系図ニ左衛門尉季宗 弥平左衛門尉宗清

奥に考傳えま治抄法ニ弥平と宗清の季宗の子

古今集の目録

明治十五年購求

平治の亂より大馬頭義朝の男右兵衛佐頼朝を  
 生捕あるに宗清がたふさふさもたふさふに世ふた  
 心もはちまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 池の尾よりあまのこころをたふさふて我子れを  
 面敷ふたあまのこころをたふさふ人のたふさふ  
 心もはちまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 宗清のたふさふのまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 宗清のたふさふのまじりおひの宗清のたふさふのまじり

思ふまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 おとろ源をたふさふ頼朝のまじり鎌倉殿のまじり  
 頼朝のまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 宗清のまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 尾張前のまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 こころのまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 ちあつたまじりおひの宗清のたふさふのまじり  
 ちあつたまじりおひの宗清のたふさふのまじり

ねも古らに信送らむ此の事一語とて東の西國へ  
 落申へに大納言とて申す東國の向付物と  
 云ふ事此の邊に申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と

此の邊に申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と  
 云ふ事とて申す事とて申す事一語と

古書類聚終言

拓植君に... 此れは... 志れひて住...

愚按東鑑卷三武衛招清池前亞相給是近日可育... 尉宗清左衛門尉平家一族也是亞相下著最初被...

歟平家零落之今泰向之條尤称耻存之由直泰... 屋島前内府云云

愚按東鑑不かくあれと其分の昔に宗清の終り... 説に志... 尉宗清妻宗清母とあり...

夫より五代を... 家もわらわ山川... 拓植君に位...

蕉翁此父なり母は伊豫の國此人と母姓を  
はきりたるありて子二男四女あり婦子儀在馬  
命清後半在馬なり二男半七郎宗房名  
金作は是れ蕉翁なりは名を更へ忠義といふ  
正保乃きしに生家明庵の公生く二勝堂  
新七郎良精乃嫡子之計良忠く仕へる家  
良忠は亦多輝也なり馬の意のいふ  
にハ風存はるこよめと私歎及ハ流絶とて

上田

蕉翁の可なり色は村家吟とて  
宗房やとてに記して學べれ

愚案 蕉翁の全傳は蕉翁の俗名藤七なりとあり藤堂  
の家は半七なりとありて蕉翁は半七なりといふは  
さうと浪高の記に寺に野地を建し碑にハ甚實とあり  
多し後此雙林寺ふす方々ありし碑に百地堂とありハ  
松尾氏此先祖に百司とあり別姓ありと此碑なり  
伊賀の國人信ふ



世尊集經卷之

侍るを寛文六年四月と云ふに思ふに付すも  
主計らせり社より宗少房を祀らるる事  
遺教を首にかけ多々御去山々一攻なり  
收るしよし  
愚案古野山は常磐報恩院の過去帳より  
遺教の傍に松尾忠冬と記せり  
頻りに此世はわが身を道行くに  
せらるるなり  
文武はけしむるを  
おまゝに秋は次第なる事

宗右にけしむる事  
と云ふにあり候家  
門は御所  
二雲を御所

愚案此時良忠の子良長は宗右房三太郎  
忠に記す家を續しむ事は續枝桑路逸傳第三卷  
忠義翁傳又仕府主君而有忠勤云宗右房の位し家と略し  
去藩町といふ所なり



去冬十月會司



上



去冬十月會司



つれくさる折もや笠をさけり終る詞  
秋風は公もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる  
如親の口もさかちり竹を吹きこもる

上九

汝なかり西のほふらぬ  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる  
如けのさかちり竹を吹きこもる

結

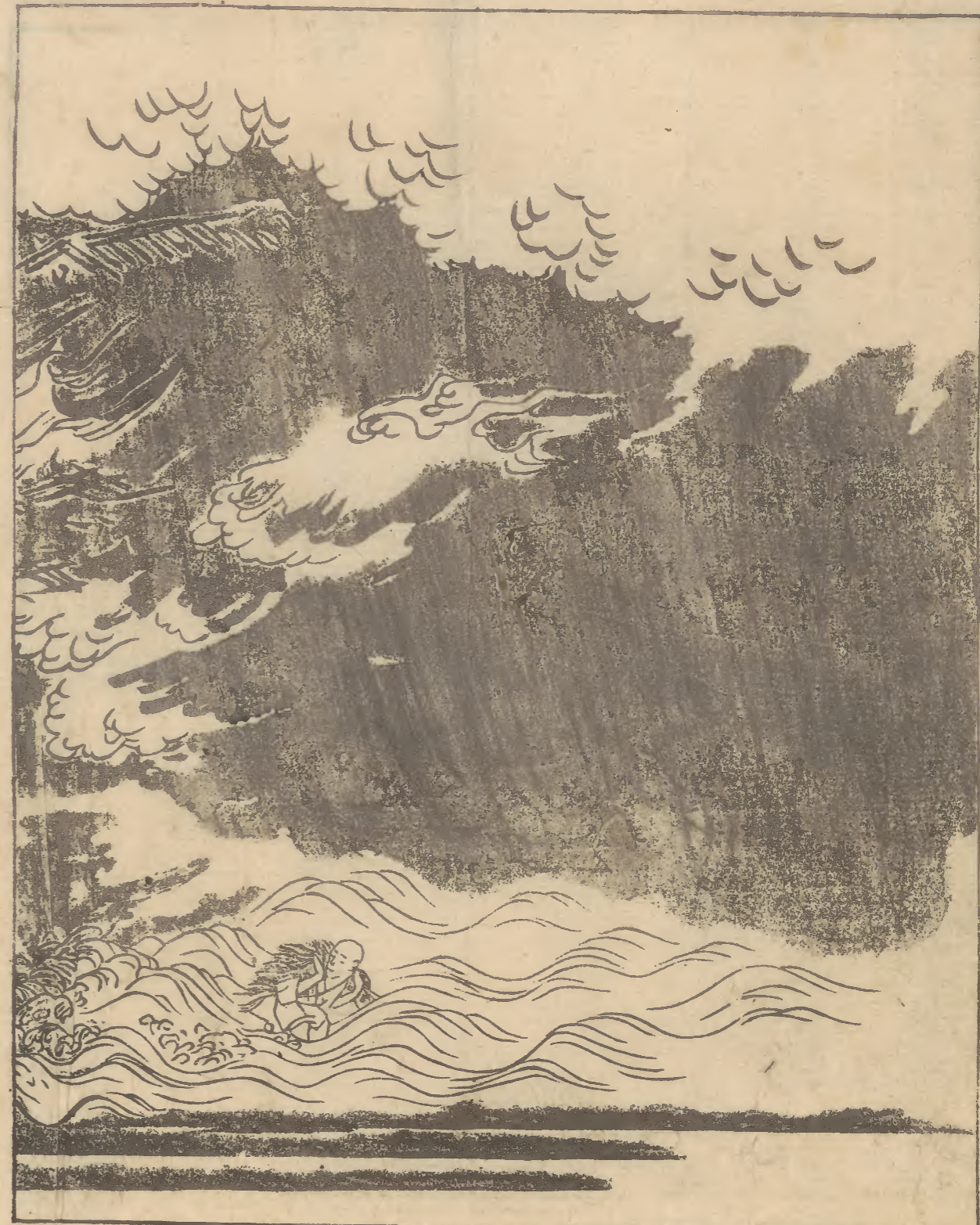
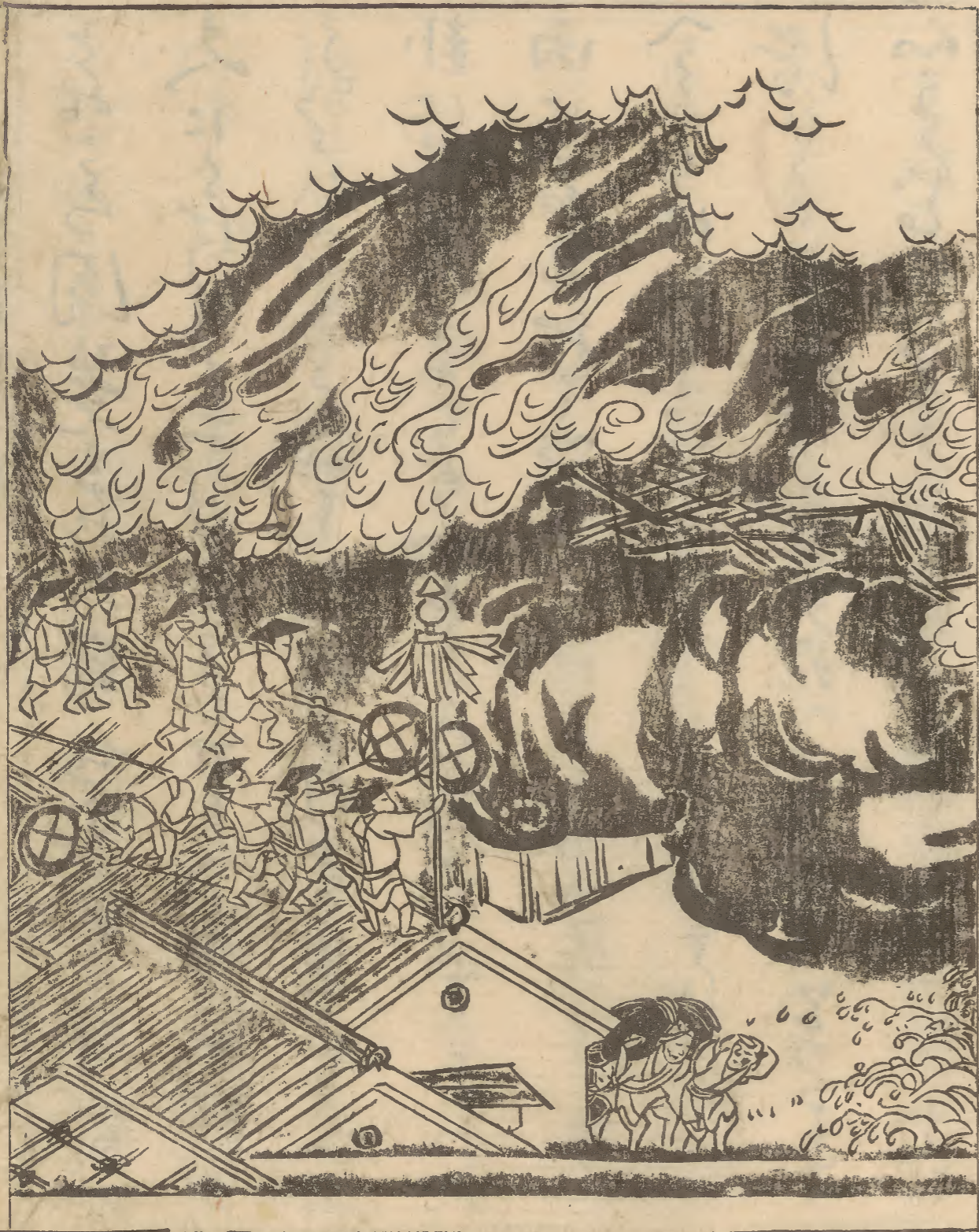


Vertical text on the left margin of the first page, likely a page number or chapter indicator.



Vertical text on the right margin of the second page, likely a page number or chapter indicator.

あるは〜 帯はあつちかゝ火お〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜  
あ〜 ちかゝあ〜 ちかゝあ〜



山崎草子繪

其の國是を大蘇者言の周易は  
又には一は一は一は一は一は一は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は

其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は

其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は  
其の國是を大蘇者言の周易は

昔は我が身をたもててはなれど  
今は世に身をたもててはなれど  
昔は我が身をたもててはなれど  
今は世に身をたもててはなれど  
昔は我が身をたもててはなれど  
今は世に身をたもててはなれど

昔は我が身をたもててはなれど

昔は我が身をたもててはなれど  
今は世に身をたもててはなれど  
昔は我が身をたもててはなれど  
今は世に身をたもててはなれど  
昔は我が身をたもててはなれど  
今は世に身をたもててはなれど

天よ〜〜汝の性〜〜

古今集卷之四





芳野之葉不人語亦如人言其音聲其如鳥鳴之  
 既より其音聲其如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之  
 如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之  
 露亦如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之  
 伊勢亦如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之  
 里亦如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之  
 紫流亦如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之既より其音聲其如鳥鳴之

古事類聚卷之四

去冬...



上十七



去冬...

長月おひしめ古心一掃も終ひるに水出雲乃  
夢中もあつれをさしつゝと流るに遠く何事も  
昔より如くまては流るゝお終ひふく田舎の  
よふまゝの心おさるゝと見の時もくも  
とあつちの心も母おの心おのよの浦をわ  
りおの心もあつれもあつれもあつれもあつれ  
流るゝ

あつちの心もあつれもあつれもあつれもあつれ

貞享二丑の心もあつれもあつれもあつれもあつれ  
流るゝとあつちの心もあつれもあつれもあつれもあつれ  
奈良の心もあつれもあつれもあつれもあつれもあつれ  
あつちの心もあつれもあつれもあつれもあつれもあつれ

古蹟新編言



古蹟新編言

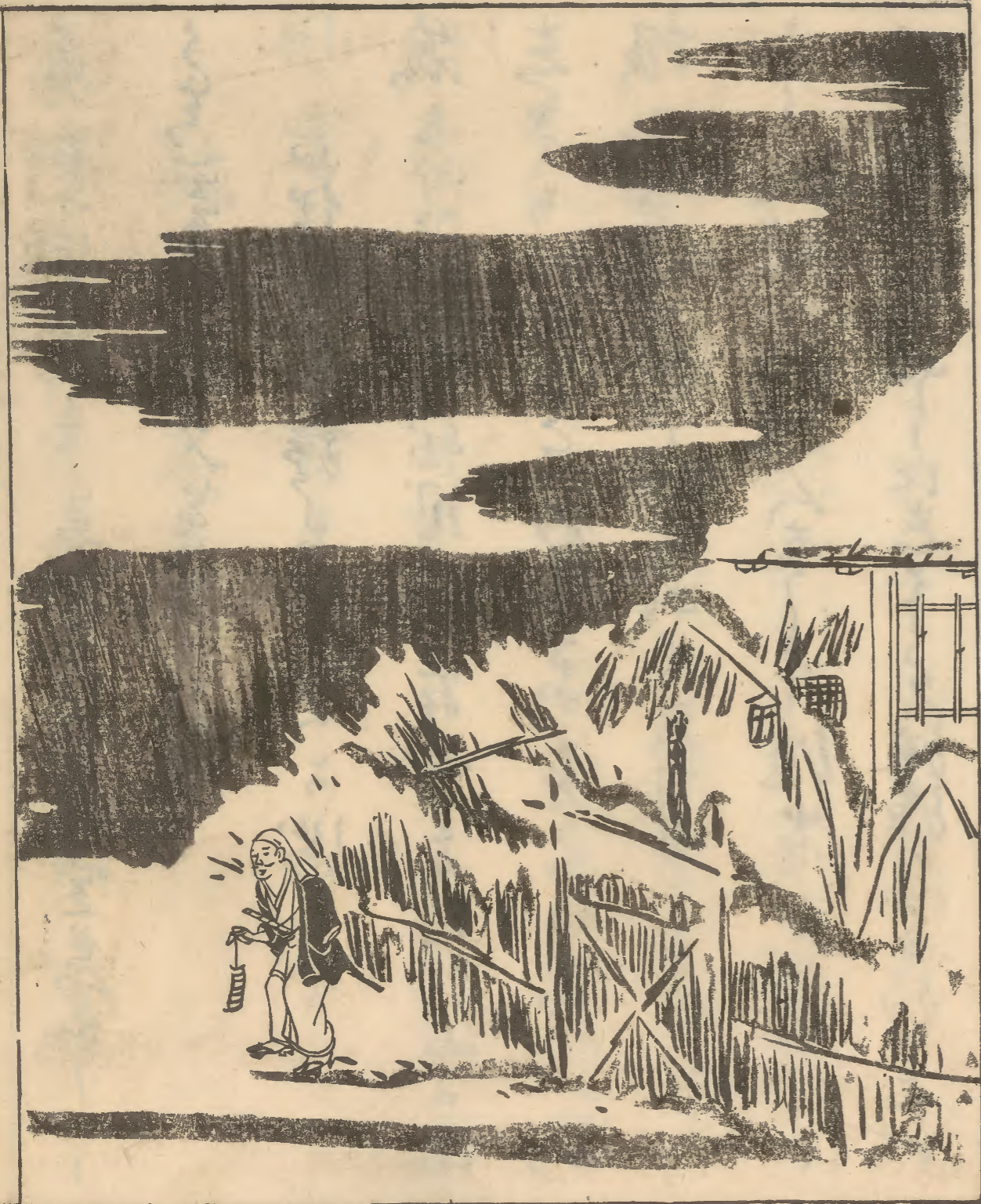


大津乃雪白の家少く湖水飄々  
 唐岐の松と花よと書はるる  
 お月乃すまは江戸の隅の隅  
 夏と秋と春と冬と  
 秋も半ばおとすも  
 夕やけささめおとす  
 奥喜ぶに雲は  
 古くは

雪のふりおもく降けは夕にお  
 らぬ人おとすも遊び  
 ましと春は人へ  
 りあれと海へ  
 米よ

古蘇美繪詞集

上九一



上九一



上九一

自天而下  
其下  
其下

其下  
其下

其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下

寺一棟  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下

愚按  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下

我  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下

旅人  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下

其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下  
其下

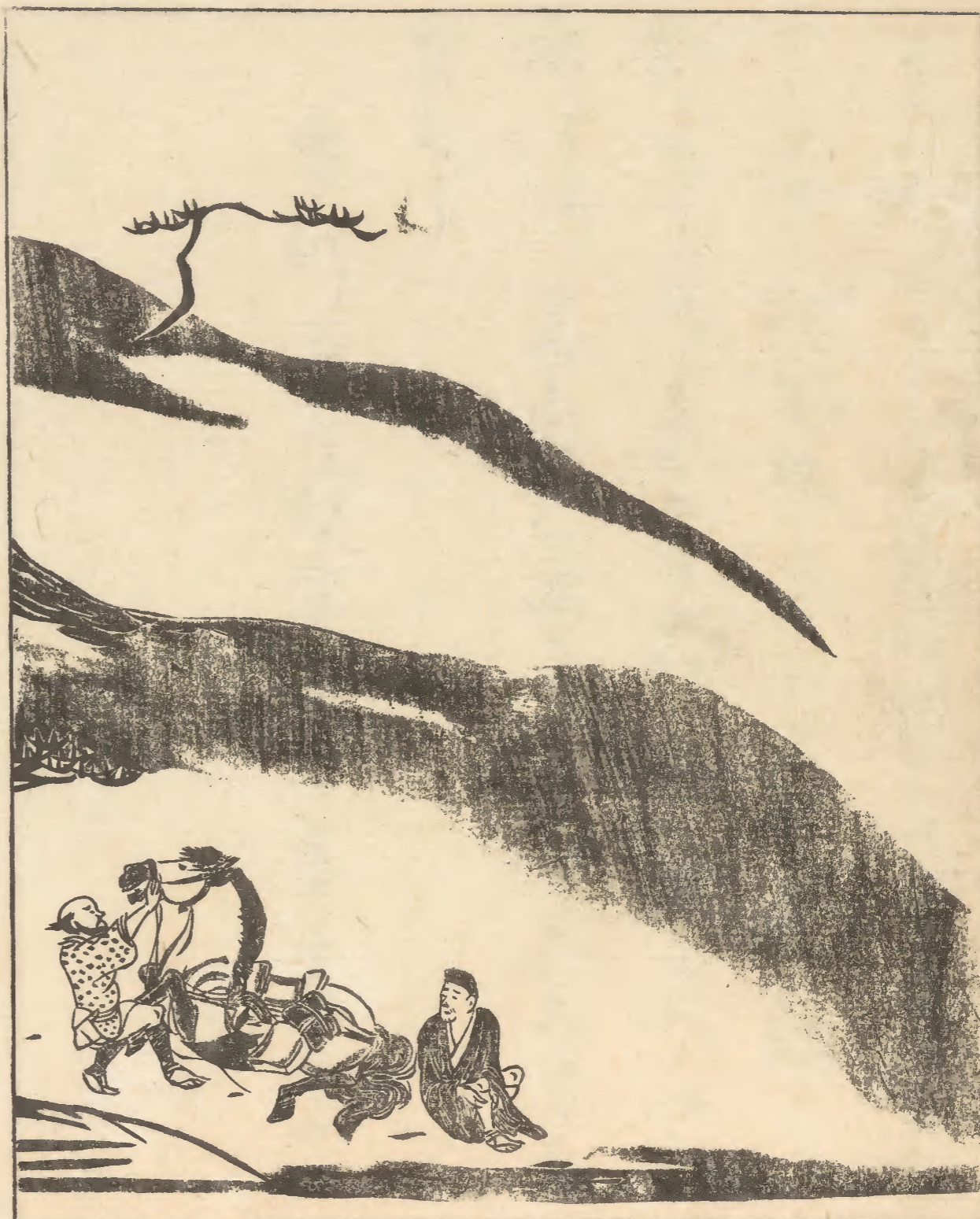




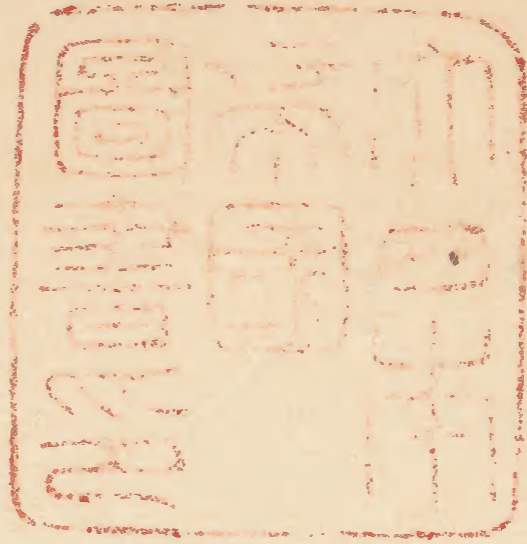
和入山の御座



上九四



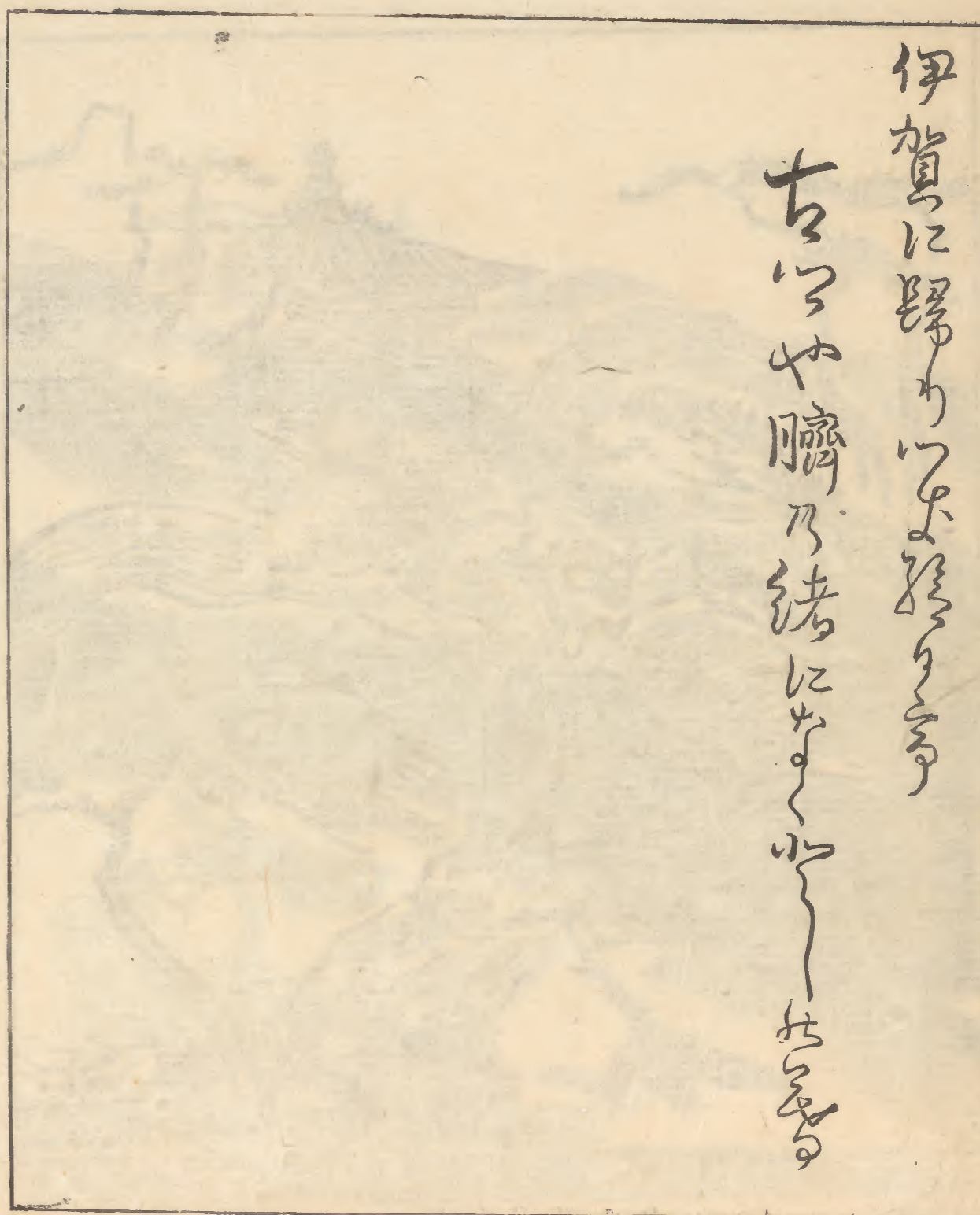
上九四



伊賀守印

伊賀に歸りては

古くや臍乃緒に



上  
五

